わが六道の闇夜

円春

わが六道の闇夜

水上 勉

読売新聞社

わが六道の闇夜

昭和四十八年 九月 十日 第一刷
昭和四十八年 十 月三十日 第三刷

著 者 水上 勉

発行者 松田延夫

発行所 読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一 〒100
大阪市北区野崎町七七 〒530
北九州市小倉区明和町一の一一 〒802

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価 六〇〇円 0095-701370-8715

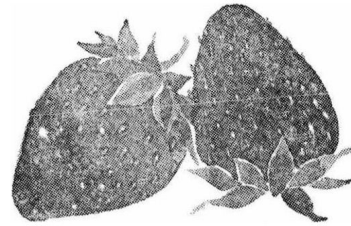
©, Tsutomu Minakami, 1973

わが六道の闇夜

装丁　朝倉　摂
題字　著者
カット　加山又造
森田曠平
橋本明治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに



まだ禅寺で暮らしていた頃、僧堂にいた兄弟子が、休暇をもらって帰ってきて、何やかや厳しい禅堂生活の模様を教えてくれた際に、老師の前に出て、難問に答えねばならぬことの苦労話をし、「父母未生以前の自己」ということばをいった。もとより中学生だった私に、何のことやらわからなかった。父母がまだ生まれない頃に、自分は生きていようはずもないし、馬鹿げたことをいうやつだ、という気がした。父母あって初めて自己があり、父母なき時に、自己はあり得べくもない。自己がなければ、是非利害、得失苦楽の揀択(かんたく)などはないのだ。全く相対差別をはなれた、絶対無差別の深所をいうと「禅語辞典」にあるが、もちろん、これも、あとで禅宗史

を教えられた時に習った消息で、私にそれが会得できていたわけでもない。

私という人間が、今日まで生きてきたことを私は知っている。その私がいったい何者かと自問すれば、父と母から生まれたことは信じてよい。いや、ある時は、真に私は私の父母の子だったろうか、と、(父母に申しわけない話だが)出生を疑ってみて、赤ん坊の頃にどこかに捨てられていたのをいまの父母が拾って育ててくれたのかもしれぬ、真実の私の父母は、いまの生家にはいなく、べつの、この世のどこかで生きており、私はいまの父母を、真の父母だと信じこまされてきたのかもしれぬ、などと真剣に思い悩んだりしたこともある。兄弟五人のなかで、私だけが、九歳で寺へ小僧に出された不可解さも手つだって、自虐性のつよかった私は、五十四歳の今日でも、深夜、ふと、そんなことを考えこみ、己が出生の一、二年前のわが家の事情など、ひそかに、人にきいてみたり、調べてみたりしたことなど思いおこしつつ、眠れぬことが多々ある。馬鹿げた親不孝者の一語につきる。

だがこの世で、自分が生まれてきた時のけしきを自分の眼で見た人間はいるまい。ある天才作家は、誕生直前に、母親の臍の穴から、世の中をのぞき見、さてど

うしようかと思案してみたと書いていたが、もちろんこれは絵空事であって、私たちに、あの一瞬世の中のけしきがみえたはずもない。父や母やが、眼にうつったのは、生後何日かして眼があいた日であろう。これではどうにもならない。かりに眼があいていても、抱いてくれていたひとが、母であったか、祖母であったか、己れにわかるはずもなかった。母だったとわかるのも、長じて、誰かに教えられ、それが見たようなけしきになって、理解されるだけのはなしだ。その誰かが、人わるく嘘を教えておればまたそれまでのはなしであって、凡庸な私など、父母未生以前どころか、我れ誕生の頃の、「我」の感覚はもちあわせておらぬ。世界は、うす紫色にただぼやっとかすんでいた。母なる人の腹から出た胎盤の匂いが、酸っぱく鼻をついたといえばこれもまた嘘だ。眼、鼻、耳、舌、身、意。すなわち六趣の働きなるものは、漸次に身にそなわったようで、左様、はじめに見たものは、餅肌のような（これものちの智恵の形容だが）母の胸のあたりであったろう。しかし、これも、二、三歳まで乳をほしがった私のことゆえ、生まれてだいぶたってからの記憶かもしれぬ。

私を語るこの一文が、事実そのとおりのことを書けるとは思えない。記憶ほどあぶなっかしいものはないし、また、事実を語るということもむずかしい。私という人間は、ペンをとると、たとえば、その日の「日記」を一枚書いてさえ、きびしくいえば、どこかに嘘を書く。記憶ちがいを書く。これでは、事実そのままを完全に記録することは出来ない。それで、そのような癖を、なるべく、自制し、私という人間が、どういう育ち方をして、今日のようなひねくれた心の持ち主になったのか、そこらあたりの事情を、出来るかぎり書いてみたいと思いたったのが、この文章である。「わが六道の闇夜」と題したが、六道は闇路だという意味で他意はない。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。お釈迦さまはうまいことをいったものだ。私は今日も六趣の世界を手さぐりで、闇夜を生きている。仏さまも神さまもまだ見たことがない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

章

大正八年三月八日に、福井県大飯郡本郷村字岡田に生まれた。若狭湾にのぞんだ村から狭い谷を半里ばかりはいった六十戸たらずの部落だった。父は三十二歳。母二十二歳。二歳の兄がいた。

祖母は六十九で、もう腰がまがっていて、娘じぶんに小豆のサヤで眼を突いたのがもとで全盲になっていた。幼少時に見た記憶しかないのだが、外歩きは竹杖をはなさず、家のなかでは這い歩きしていた。私と兄とは、この盲目の祖母に背負われて育った。

父は大工職人だったが、弁舌家で理屈をいわせれば村のだれにも負けなかったと

言われるほどだったので、村のだれからもきらわれ、仕事は部落でせずに、駅のある本郷村や、汽車で行かねばならない、小浜、高浜へ出かけ、めったに家にいたことがなかった。家にいなくても、金さえ持ち帰ってくれれば、母は苦労しなくてすんだろうが、生活費はおろか、電灯代まで払い遅れたので、私が四歳の時、祖母が死んだ年、電灯は無くなった。腰にペンチをつるした工夫がふたりきて、家の前まで引き込み線できていた電柱を抜きとると、軒下にさしこまれていた線を切って帰った。白い陶磁製の絶縁棒が二本のこされてコードの切れはしがトカゲの尾みたいに長らく残っていたのをおぼえている。

それから、太平洋戦の昭和十九年まで約二十数年間わが家に電灯はなかった。

この一事をみても、家を省みなかった父の性格がわかるのである。大工のくせに、戸が破れても敷き居がまがっても直すことなく、壁が落ちても、板をもってきて立てかけてはおくが、これとて普請場からもってきた施主さまの所有物なので、いつのまにか、一枚二枚と持ち去られた。

家というようなものではなくて、藁ぶき屋根の小舎(こや)だった。一坪の土間、六畳くらいの板の間、そこに炉。奥に四畳半の座敷、そのよこに三畳の納戸。土間のよこに三畳の寝間。これが間取りである。

土間といわず、板の間といわず、年じゅうボロがつるされていて、洗濯のゆきとどかない私たちのシャツや寝巻き、父の仕事着、母の下着、野良着など、所かまわずひっかかっていた。タンスとか長持ちとかもなく押し入れも無かったせいだろう。なぜ、あれほどわが家がちらかって、汗くさく、カビくさかったのか、戸口のすぐ軒下にはだか桶を一つ置いたのが便所だったせいもあろうか。とにかくそこらじゅうがきたなくてくさかった。

金を送ってこない父が、町で十日も二十日も流連(いつづけ)して戻ってこないことがたびたびあって、母は、しかたなく部落の小作田を守りした。一家の扶持米のためである。日傭だから、主家の人らが田へ現われる前に、一と足早く着いていなければならなかった。早起きの母の姿を、私たち子供はみたことがなかった。朝起きると、炉端につくねんと頭をかかえた盲目の祖母が待っていた。

「お父のような道楽者になるな。大きなったら、おっ母んを助けてやれやア」

と祖母はサザエのフタのようにつぶれた目をぬらしていった。

小さかった私に、そんなことを言って聞きわけのきくはずもないのに、祖母は死ぬまでそのことを言い通した。そう言うことで、母への思いやりを示したかったのか。十六で嫁にきて、兄を生み、私を生んだのち、弟三人、妹一人をつぎつぎと年子のように生んで、一家のために小作に出て働いた年若い母に、祖母はふかい感謝を言いたかったのかもしれない。

のちにきいたことだが、父には嫁に来てがなかったという。盲目の姑がいたせいだ。どういうわけか、母は十歳も年のちがう、村では晩婚の部にはいる父と恋愛して、この小舎のような家へ来た。そういえば、村の観音堂の白壁に落書きがあったが、傘印の下に「覚治・かん」という両親の名を、私は小学生のころにみている。村でもふたりの結婚は話題をまいたのだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com